公益社団法人日本地球惑星科学連合
第 16 回　グローバル戦略委員会
(2017 年度第 3 回グローバル戦略委員会)

開催日時：　平成 29 年　11 月　13 日（月）　午後　12 時　30 分から　2 時　30 分
開催場所：　東京大学理学部 1 号館 839 教室
（東京都文京区本郷 7-3-1）

0. 第 15 回(7/21(金))議事録確認　Item 0: Approval of Minutes / Review of action items　.....P2-5
1. 審議事項
1-1. JpGU-AGU Joint Meeting 2020 への展望と今後の国際活動　Kimura P5
1-2. グローバル戦略委員会の今後の人事について　Kimura P5
1-3. アジア戦略地域における国際連携の今後とアクション　Takahashi　.....P5-7
1-4. 第 2 回アジア太平洋マントル・リソスフェアダイナミクスに関するワークショップ共催申請について　Nakagawa P8-12
1-5. AGU Fall Meeting 2017 での Leadership Get-together について　Suyehiro　.....P12
2. 報告事項
2-1. 中国地球科学連合学会年会参加報告　Nakagawa P12-13
2-2. IAG-IASPEI Kobe 参加報告　Shirai.....P14-16
2-3. AOGS 2017 Singapore 参加報告　Shirai.....P16-20
2-4. JpGU Meeting 2018 での AGU/AOGS/EGU との Joint Session について　Hamano P20-25
2-5. Myanmar geoscientific community for JpGU　Suyehiro　.....P25-27
2-6. オープンサイエンス関連動向の紹介　－AGU「プレプリントサーバ」の議論へ向けて－　Murayama　.....P27-34
2-7. GSA 参加報告　Kawahata　.....P35-36

委員会名簿-

委員長	理事	木村学	東京海洋大学	○
副委員長		ウォリス　サイモン	東京大学	○
	理事	日比谷　紀之	東京大学	×
	理事	西　弘嗣	東北大学	○
	セクションプレジデント WG 委員長	高橋　幸弘	北海道大学	○1:30PM-
	セクションプレジデント	蒲生　俊敬	東京大学大気海洋研究所	○
	セクションプレジデント	春山　成子	三重大学	○
	セクションプレジデント	大谷　栄治	東北大学大学院理学研究科	○ ZOOM
	セクションプレジデント	遠藤　一佳	東京大学	×

		木下 正高	東京大学地震研究所	○
		末広 潔	国立研究開発法人海洋研究開発機構	○
		関 華奈子	東京大学	×
		田島 文子	University of California at Irvine	○
		橘 省吾	北海道大学	×
		中村 尚	東京大学先端科学技術研究センター	×
		藤本 正樹	国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構	
		三宅 弘恵	東京大学地震研究所	○
		村山 泰啓	国立研究開発法人情報通信研究機構	○

	会長	川幡 穂高	東京大学	○
	前会長	津田 敏隆	京都大学	×
	副会長	田近 英一	東京大学	×
	副会長	中村 正人	国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構	×
	副会長	古村 孝志	東京大学	
	大会運営委員長	浜野 洋三	国立研究開発法人海洋研究開発機構	○
	WG 委員	松本 淳	首都大学東京	○
	WG 委員	久保田 尚之	北海道大学大学院理学研究院	○ ZOOM
	WG 委員	津川 卓也	国立研究開発法人情報通信研究機構	○
	オブザーバー	中川 貴司	国立研究開発法人海洋研究開発機構	○

0. 前回議事録確認

Global Strategy Com Meeting #15
Date: 2017 July 21, Friday 12:30-14:45
Room: The University of Tokyo, Faculty of Science Building 3, Rm 320,
2-11-10 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo

Attendee:
Global Strategy Committee (GSC) members: Gaku Kimura (Chair),
Simon Wallis (Vice Chair), Kazuyoshi Endo, Toshitaka Gamo, Masataka Kinoshita, Hiroe Miyake, Yasuhiro Murayama, Hiroshi Nishi, Eiji Ohtani, Kiyoshi Suyehiro,
Fumiko Tajima (Skype), Yukihiro Takahashi (Skype, Working Group for Collaborations with Asian and Pacific Academic Societies Chair)
WG member: Takuya Tsugawa (Skype)
President: Hodaka Kawahata
Vice President: Masato Nakamura

JpGU Office: Yozo Hamano, Kayoko Shirai, Yohei Sugimura
Regrets:
Global Strategy Committee (GSC) members: Masaki Fujimoto, Shigeko Haruyama, Toshiyuki Hibiya, Hisashi Nakamura, Kanako Seki, Shogo Tachibana
WG member: Jun Matsumoto, Hisayuki Kubota
Past President: Toshitaka Tsuda
Vice Presidents: Eiichi Tajika, Takashi Furumura

Distribution:
1: Agenda book (pp. 61)
2: JpGU-AGU 2017 Joint Meeting statistics
3: JpGU leaflet

Meeting Summary: ACTION ITEMS
1: 2020 年大会を AGU との共催にすることを理事会に具申する（木村、全員：前回議事録再掲）
2: JpGU が先進性を維持しながら、国際的にはっきりと生き残る方策を考える（全員）
2: 2017 AOGS の際に、アジア戦略およびジョイントの可能性について、キーパーソンと議論する（高橋）
3: 2018 年以降にアジアとジョイントする際の課題を継続審議する（全員）
木村委員長により 12:30 開会した。

議題１．当日開催の理事会への提案内容
前回委員会において、2020 年大会を AGU との共催にすることを理事会に具申することとなった（Action Item 1）。普段着の 2020 Joint Meeting に向けて、大学院生や大学運営費の減少等を含め、前回のアクションアイテムに基づき議論した。
＜2017 JpGU-AGU Joint Meeting の分析＞
アジアからの参加者は増えたが、国内の人数はそれほど増えていない。
AGU ブランドがあるとアジアから来やすいようである。
日本・米国・中国・台湾・韓国からの参加が多い。
海洋学会のように、2017 年大会を連合参加の試行期間とした学会もある。
＜今後に向けての議論＞
JpGU が先進性を維持しながら、国際的にはっきりと生き残る方策を考えることが重要（Action Item 2）。
学会経営の戦略的に行うことも重要。
国際性の縮小は危険である。AGU の対 AOGS や対中国政策についても注視。
大学院生や大学運営費が減っているのは事実なので、学生賞や首都圏以外の学生等に対する旅費補助等の取り組みが必要。
川幡会長より、今後の JpGU 大会の見通しについて説明があった。
2019 年は JpGU 30 周年にあたる。
2020 年の AGU とのジョイント（幕張）は、執行部が完全に入れ替わらないタイミングを考慮したためである。また、

AGU と定期的に Joint するかどうかは現段階では決めていない。これらを踏まえ、2018, 2019, 2020 をどのように積み上げていくかが重要である。

議題２．アジア戦略

アジア太平洋協力作業部会の津川 WG 委員より、東南アジアでジョイントできそうな規模の学会を探してきたが、そもそも大きな学会がなく前回議事録以上の進展はないとの報告があった。

その他下記の意見があった。

- 仮に 2019 年に開催するとしても、動き出さないとまずい。
- 台湾や中国は学会の規模が大きい。一方、東南アジアだと Joint Session から始める形になるであろうか。
- Wallis 副委員長より、台湾とのジョイントについては、一度関係者が訪問すると効果的かもしれないとの発言があった。
- 台湾側の意向を要確認、2019 年に実施しない場合は連絡を。
- ジョイントの方法は、同じタイトルセッションを相互で実施、琉球海溝などの地域性を生かしたセッションなどがあるが、それに加えて一般的なセッションがどのくらいの数立ち上がるかが重要

2018 年大会のセッション公募が 2017 年 9 月からはじまる。まずは Joint Session でアジア戦略の脈を診るのが良いのではないか？ その蓄積をもって Joint Meeting を開催するかどうか考えてはどうか。
Bottom up 的な発展が望ましい。学会と学会の交流などを利用してもやりやすいかもしれない。
アジア戦略としての MoU 締結の議論がなされたが、キーパーソンを含め、相手が特定されていないので、MoU の結びようがないとの意見があった。
田島委員より、JpGU と EGU の場合は、2007 年に MoU が締結され、Joint Session が立ち上がったのは 2010 年であった経緯を踏まえ、Joint に対する準備期間の示唆があった。
AGU との場合、MoU に締結した後、2016 年大会の Joint Session を経たことが、2017 年 Joint Meeting の成功につながったとの意見があった。
2017 年 8 月初旬の AOGS において、高橋 WG Chair が関係者と相談することになった (Action Item 3)。

議題３．アジアとジョイントする際の課題

事務局より以下の問題提起があり議論した。
＜アジアからの大会参加費割引＞
MoU の有無や Joint Session 参加等の条件を設けるかどうか
財務に関わるので少なくとも 2018 年度は難しい

＜e-poster 導入＞
スキルを上げるため e-poster の事前練習が必要である
参加学会 50 学会にアピールする場として e-poster を呼びかける方法もある
e-poster に必要な資材や予算をまとめた資料を作成する必要がある

＜キーパーソン招聘（学協会関係者への呼びかけ）＞
海外のパートナーとなる方について 1 年程度かけて準備しても良い
招待講演にして旅費は自弁あるいは招聘側が探しても良い

いずれもプログラム委員会や大会運営委員会、財務、理事会の承認が必要であり、プログラム委員長やプログラム委員会に事前打診が必要である。これらの課題について、グローバル戦略委員会で審議事項として引き続き検討する。(Action Item 4)。

次回委員会は、2017 年 9 月の理事会の前に開催予定。
14:45 閉会

1-1. JpGU-AGU Joint Meeting 2020 への展望と今後の国際活動

-資料なし

1-2. グローバル戦略委員会の今後の人事について

-資料なし

1-3. アジア戦略地域における国際連携の今後とアクション

アンケート結果まとめ（10 月 12 日～27 日に学協会にお願いした)

No	学協会名	I-1a MOU の有無	I-1b 学会レベルで定期的な交流	I-2 I-1 が「いる」の場合、先方の学会名	I-3 「結んでいる」とお答えの場合、具体的にどのような協力関係にあるか	II-1 学協会と MOU を結ぶ計画など、具体的な予定	II-2 予想される障害
5	日本火山学会	いない	いない	学会ではないが、日本火山学会およびシンガポール南洋工科大学が中心となり、インドネシア・フィリピン・中国・韓国・台湾の火山研究機関とアジア火山学コンソーシアムを結成し、運営	年 1 回のフィールドキャンプを開催し、各国の若手が参加する研究集会を開催	同上アジア火山学コンソーシアムを IAVCEI(国際火山学及び地球化学協会)の活動として実施することを検討。	（無回答）
8	日本気象学会	いる	-	The Chinese Meteorological Society The Korean Meteorological Society	2 年毎に、日本、中国、韓国の気象学会が持ち回りで、Asian Conference on Meteorology（日中韓気象学会共催会議）を開催	（無回答）	（無回答）
10	日本地図学会	いない	いない	-	-	地図学分野の国際的な活動は，国際地図学協会（ICA）のもと	対近隣諸国に関しては，領土問題，日本海呼

						で行っている。現時点で特定地域の学協会との交流の具体的な計画はない。	称問題の扱いに注意が必要である。
11	日本古生物学会	いない	いない	-	-	中国古生物学会との協定を結び、合同シンポジウムなどの開催を考えている。	（無回答）
13	資源地質学会	いる	-	Mongolian Society of Economic Geologists	2014 年と 2015 年の 2 年間にわたり，会長ほかがモンゴルへ出張の際にシンポジウムを開催した.	（無回答）	（無回答）
20	石油技術協会	いない	いない	-	-	海外学会との交流はありますが、アジア太平洋に特定した学協会との交流予定は現在ありません。	（無回答）
23	日本大気化学会	いない	いない	-	-	（無回答）	（無回答）
24	日本堆積学会	いない	いる	Korean Sedimentology Research Group Chinese Society of Sedimentologists Geological Society located in Taipei	（無回答）	MOU を結ぶ計画はないが、上記学会と協力して、3 年毎程度で研究集会（Western Pacific Sedimentology Meeting）を開催	東アジア域の安全保障・政治・外交上の不安定
25	日本第四紀学会	いない	いる	「アジア第四紀学会」（ Asian Association for Quaternary Research: ASQUA）	MOU は締結していないが，「アジア第四紀学会」（Asian Association for QuaternaryResearch: ASQUA）の立ち上げに日本第四紀学会が大きく貢献し，2009 年から４年に１回， ASQUA 会議が開催されており，定期的な交流が行われている。会議開催に関し，主要メンバー国（日本，中国，韓国，台湾，ロシア）が中心となり，会議開催時に推進委員会を開催し，次回の開催を決定している。日	特になし	（無回答）

					本，中国と韓国については，各国の第四紀学会が組織的に対応している。		
27	地学団体研究会	いない	いない	-	-	特になし	（無回答）
32	日本地質学会	いる	-	大韓地質学会、モンゴル地質学会タイ地質学会、台湾地質学会	定期的に複数の学会長などを年会等に招待し、また招待されている。2018 年度は 125 周年記念事業として、学術交流のためシンポジウム等の計画も検討中	ベトナム地質学会と MOU を結ぶことを検討している。	特にない
34	地理科学学会	いない	いない	-	-	（無回答）	（無回答）
38	地理情報システム学会	いる	いる	KAGIS（The Korean Association ofGeographic Information Studies）TEGO（Taiwan Group On Earth Observations / 社團法人台灣地球觀測學會）	上記団体に当学会を加えた 3 団体で IAG'i（International Association of Geo-informatics）を形成し、毎年、持ち回りで開催する。開催はそれぞれの年次大会時であり、基調講演や参加費免除等の規定がある。	目下なし	言語（共通言語は英語としているが、お国柄もあり、伝達や意思の疎通を図ることが決してスムーズにはいかない）
40	東北地理学会	いない	いない	-	-	予定はありません。	（無回答）
43	日本農業気象学会	いない	いる	-	-	現時点では MOU を結ぶ具体的な予定はない。	（無回答）
47	日本リモートセンシング学会	いない	いる	韓国リモートセンシング学会、台湾写真測量学会	International Symposium on Remote Sensing を 3 学会で毎年共催している。	とくになし	（無回答）
48	日本惑星科学会	いない	いない	-	-	（無回答）	（無回答）

III 自由回答（日本地球惑星科学連合への要望などがあれば）		
24	日本堆積学会	・日本の複数の学協会が関係するが、学協会が直接関与しない国際研究集会（例えば、International Conference on Asian Marine Geology など）への地球惑星科学連合が中心となった支援 ・アジア諸国の小規模な専門研究グループと日本の対応する学会との連携の橋渡し

1-4. 第 2 回アジア太平洋マントル・リソスフェアダイナミクスに関するワークショップ共催申請について

国立研究開発法人海洋研究開発機構　　中川貴司

開催の経緯について：

当ワークショップは、2 年に 1 度ヨーロッパで開催されている国際マントル・ダイナミクスモデリングワークショップ（ヨーロッパ地球科学連合；EGU からの支援を受けているワークショップシリーズの一つ）や北米で開催されている地球ダイナミクスモデリングワークショップに枠組みを、アジア・太平洋域の研究者向けに開催できないかという発想で、2014 年 4 月から開催に関する議論が始まった．当初は、台湾中央研究院、東工大地球生命研究所、海洋研究開発機構の研究者が集まって、議論が行われていたが、東工大側の研究者が開催に前向きな対応が取れなくなり、台湾中央研究院の研究者の主導のもと、台湾の地球科学関連学会のサポートを得て、2016 年 9 月に台北で第 1 回ワークショップを開催した．

第 1 回ワークショップ内で、今後の構成の議論があり、アジア－太平洋域の地球惑星深部研究のより一層の発展にアジアオセアニア地球科学会（AOGS）でのセッション提案・開催とともに、当該ワークショップの運用を行い、コミュニティのさらなる発展を期することで合意形成がなされた．

第 2 回ワークショップ開催について：

今回、共催申請を行っている第 2 回ワークショップについて、報告者（申請者は愛媛大学亀山教授）が、第 1 回のワークショップ開催時に台湾側から開催を打診され、東工大側の事情も考慮し、海洋研究開発機構の研究者が主体となって開催することで合意している．当初は、申請者の所属である愛媛大学近辺での開催を模索していたが、海洋研究開発機構側からの要請もあり、海洋研究開発機構の主催ワークショップとして、海洋研究開発機構横浜研究所での開催で議論が進んでいる．日程は、2018 年 8 月 6 日から 9 日までである．

しかしながら、機構側からは資金的な援助を得ることは、機構の財政事情を考慮すると困難であり、構成研究センターならびに基盤研究分野のボランティア的な運営を行うことで開催せざるを得ない状況である．また、財団系の会議開催支援申請を模索したが、開催を決定した時期が申請時期やテーマなどと合致していなかったため、日本地球惑星科学連合からの共催・資金援助が必要な状況となっている．

現状では、機構側からは、地震・津波海域研究開発センターから共同研究招聘ということで、3 名分の旅費・参加費の援助の約束がある．現在、機構の運営費の予算案に当該ワークショップの開催に関する申請を行っているが、前述の通り、財政状況が厳しいために、予算化されることが困難であると予想される．

以上の状況により、日本地球惑星科学連合からの資金助成を含む共催が必須となっている．

当該ワークショップの開催により、アジア－太平洋域の地球惑星深部研究者コミュニティの発展に日本地球惑星連合からの援助が必要不可欠となっている．また、AOGS や EGU の地球惑星深部研究者コミュニティだけでなく、連合のコミュニティとの相互協力関係の樹立を行い、日本国内で脆弱な地球惑星深部研究コミュニティの強化に努めたい．

会議の趣旨と実施要領

名称　2nd Asia-Pacific workshop on lithosphere and mantle dynamics

期間　2018 年 8 月 6 日から 9 日（受付は 5 日から）
場所　国立研究開発法人海洋研究開発機構横浜研究所

趣旨
本ワークショップは、ヨーロッパにおけるマントルダイナミクスならびにリソスフェアダイナミクスモデリングに関するワークショップ（International workshop on modelling of mantle and lithosphere dynamics）の趣旨を基本にして、アジアー太平洋域のマントルダイナミクス及びリソスフェアダイナミクスの最新研究成果を議論・情報交換する場を提供し、関連研究者のアジアー太平洋域レベルだけではなく全世界的な国際的なネットワークを形成することを目的としている．ワークショップ自体は、2 年ごとに開催している．

主催
国立研究開発法人海洋研究開発機構

運営母体
研究者有志（SSC＝科学コミッティー間の議論で運営がなされている）

SSC 名簿
Frédéric Deschamps（Academia Sinica, Taiwan, Associate Research Scientist）
Eh Tan（Academia Sinica, Taiwan, Assistant Research Scientist）
Fabio Capitanio（Monash University, Australia, Associate Professor）
Dao-Yuan Sun（University of Science and Technology of China, Professor）
Changyeol Lee (Chonnam National University, South Korea, Associate Professor）
中川貴司（海洋研究開発機構・主任研究員）

LOC 名簿
委員長　亀山真典（愛媛大学・教授）
　　利根川貴志（海洋研究開発機構・研究員）
　　中川貴司（海洋研究開発機構・主任研究員）

LOC アドバイザー名簿
小平秀一（海洋研究開発機構・研究担当理事補佐・センター長）
田中聡（海洋研究開発機構・分野長代理）
堀高峰（海洋研究開発機構・グループリーダー）

参加費（予定）　一般 30,000 円、学生 15,000 円
参加者数（見込）　一般 40 名、学生 20 名．合計 60 名（招待講演者を含む）

プログラム概要（予定）
8 月 5 日午後　受付開始
同夕刻　アイスブレーカー
8 月 6 日午前　セッション 1 （海洋底掘削科学）
同午後　セッション 2 （地震発生物理）
8 月 7 日午前　セッション 3 （沈み込み帯のイメージング）
同午後　セッション 4 （表層から深部に至る地球ダイナミクスモデリング）
同夕刻　懇親会
8 月 8 日午前　セッション 5 （地球化学・鉱物物理学）
同午後　セッション 6 （惑星ダイナミクス）
8 月 9 日　エクスカーション

各セッションの構成は、基本的に基調講演 1 つと 2 つの研究講演で構成される．一般の参加者はポスター発表を行う．ポスター発表は約 30 件程度見込まれ、開催期間全日掲示により、参加者同士の自由な議論を促進する．

招待講演予定者（決定分のみ；順不同）
平朝彦（海洋研究開発機構・理事長；日程調整中）
木村純一（海洋研究開発機構・分野長代理）
中島淳一（東京工業大学・教授）
寺川寿子（名古屋大学・講師）
田阪美樹（島根大学・講師）
鎌田俊一（北海道大学・特任助教）
Sylvain Barbot (NTU, Singapore, Assistant Professor)
Sung-Joon Chang (Kangwon National University, South Korea, Assistant Professor)
Nicolas Flamant (University of Wollongong, Australia, ARC DECRA Fellow and Lecturer)
Yoshihiro Kaneko (GNS, New Zealand, Researcher)
Ban-Yuan Kuo (Academia Sinica, Taiwan, Research Fellow)
Wei Leng (USTC, China, Professor)
Eric Mittelsteadt (Univ. Idaho, Assistant Professor)
Kenny Viella (Academia Sinica, Taiwan, Postdoctoral Researcher)

Discussion Leader（決定分のみ；順不同）
Paul Tackley (ETH, Zurich, Switzerland, Planetary geodynamics)
Rhodri Davies (ANU, Australia, Geodynamics modeling)

収支概算について（単位は日本円）：
１．　収入
　　参加登録：1,500,000（一般：30,000x40+学生：15,000x20）

文部科学省委託経理金（ポスト京重点領域研究費）：400,000（旅費援助）
JAMSTEC 運営費交付金：300,000（旅費援助、記念品、リフレッシュメント＋雑費の一部）
計：2,200,000

2．　支出

旅費補助：200,000x2=400,000（文部科学省委託経理金）、200,000x1（JAMSTEC 運営費交付金）
懇親会費：300,000
ice breaker：400,000
記念品（エコバッグ、ノート、ボールペン）：200,000
エクスカーション（バス代：横浜駅ー清水港往復）：400,000
リフレッシュメント＋雑費：300,000
計：2,200,000

収支差額：0

2017 年　10 月　20 日

公益社団法人日本地球惑星科学連合　会長　御中

共 催 ・~~協 賛 ・ 後 援~~承 認 申 請 書

申請団体名：AGMT2018 実行委員会
申請者住所：愛媛県松山市文京町 2－5
申請者名： 亀山　真典（AGMT2018 実行委員会委員長）

行事名（英訳名）	リソスフェア・マントルのダイナミクスに関する第2回アジア・太平洋域ワークショップ （英文公式名がある場合：The 2nd Asia-Pacific Workshop on Lithosphere and Mantle Dynamics ） 会議の種類：（ □国内会議　■国際会議 ）
主催者名	国立研究開発法人海洋研究開発機構ならびにAGMT2018実行委員会
開催日	2018年8月6日（月）～2018年8月9日（木）
開催場所、所在地	場所：国立研究開発法人海洋研究開発機構　横浜研究所 所在地：〒236－0001神奈川県横浜市金沢区昭和町3173－25
申請の種類	■共催　（企画又は運営に参画し共同で開催する） □協賛　（趣旨に賛同し、必要に応じて金銭的・人的支援をする） □後援　（趣旨に賛同し、必要に応じて人的支援をする） □その他　（ ）
金銭・人的援助の有無	無・有（具体的に：基調講演者 2 名の旅費一部援助：200000 円 x2；基調講演者 5 名分の参加費 30000 円×5）

行事趣旨	本ワークショップはアジア・太平洋地域のリソスフェア・マントルのダイナミクスに関する研究者を結集し、研究成果の共有や、新たな共同研究の契機となることを意図している。2016年9月に台湾で開催された第1回目に続く第2回目のものである。
共催、協賛、後援等 団体名(申請中も含む)	
希望する共催・協賛・後援の名称	■公益社団法人日本地球惑星科学連合 その他（ ）
連絡先 (受理通知等送付先)	所在地：〒790-8577 愛媛県松山市文京町2－5 団体名：愛媛大学 地球深部ダイナミクス研究センター 担当者名： 亀山 真典 TEL：089-927-9652 FAX：089-927-8167 E-mail：kameyama@sci.ehime-u.ac.jp
参加費等	（ □無料 ■有料 ） 参加予定人数 60 人 会員 団体 円 個人 30000円 学生 15000円 非会員 団体 円 個人 円 学生 円
会議のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ	http://agmt2018.html.xdomain.jp/

＊選択する項目については囲むか、チェックをお入れ下さい。

＊会議・行事の趣旨のわかる、開催案内、プログラム、組織委員会名簿、会議全体の予算、開催案内、プログラム等を添付して申し込み下さい。

＊原則として、経費や人的負担はいたしかねますが、必要あれば妥当性を判断しますので希望をお知らせください。

＊公益社団法人地球惑星科学連合の名称のほか、同セクション名や委員会名での共催・協賛・後援ができますので、ご希望をお知らせ下さい。

＊2013 年 12 月 19 日理事会書式改正

1-5. AGU Fall Meeting 2017 での Leadership Get-together について

-資料なし

報告事項

2-1. 中国地球科学連合学会年会参加報告

CGU Annual Meeting レポート

国立研究開発法人海洋研究開発機構

中川貴司

10/15-18 まで、北京国際会議センターで開催された中国地球科学連合（Chinese Geoscience Union; http://www.cugs.org.cn）の年会に参加してきた．報告者は 10/16-17 までの参加であることに注意されたい．きっかけは、CGU で、JpGU のような国際化セッションを増やしたいという意図があり、台湾中央研究院の Li Zhao 研究員ならびにコロラド大学の Shijie Zhong 教授らを中心に、地球ダイナミクスに関する国際セッションが提案され、報告者は招待講演者として参加した．

学会自体の雰囲気は、国際化推進を行う前の JpGU とよく似ていた．受付も各構成学会のアルバイトの事務員の方が取り仕切っていた．違いといえば、学生アルバイトの存在があまり感じられなかった．受付に数名いるだけで、会場でも同様に座長が全ての発表を取り仕切っており、学生アルバイトの会場係の存在はほとんどいない．ここから推測するには、学生には、指導教員などから、十分な旅費支援があるため、学生アルバイトをしなくても参加できるということであろう．

学会参加費について、参加費は JpGU 参加費より格段に高く、一般参加者は、1,900 元＝38,000 円（学生は、1200 元＝24,000 円；1 元=20 円として）だった．もし、早期登録できていれば、1,600 元（学生 1000 元）です．この中には、開催期間中の昼食費などが含まれている．食事代を差し引いても、まだ JpGU よりは割高である．予稿投稿時にも感じたが、基本的には、中国語がわからないと早期登録や予稿の投稿ができないシステムであり、中国がわからない報告者は、そのシステムに非常な不便を感じた．多少の問題はあるが、日本語・英語の 2 つの言語で運用している JpGU のシステムが優れていると考えられる．

参加者数は、日本の 10 倍の人口を持つ国だけあって、相当数いたと思われるが、正確な人数は把握できなかった．特に、十分な旅費支援があるために、学生参加者が多い感じは受けた．

報告者が参加したセッション以外、ポスターも含めた研究発表は、全て中国語で行われていた．ただし、日本人には多少なりとも中国で使われる漢字の意味を捉えることは可能であり、JpGU に参加した欧米からの研究者のように、まったく意味不明な状態に陥ることはあまりなかった．しかし、口頭発表において、質疑応答が白熱することがあり、その中に、中国語話者でない人がその輪に入ることは非常に難しい．口頭発表会場の広さは、幕張メッセの 60 から 70 人部屋程度の大きさで、油断すると立ち見になる感じであった．ポスター会場は、会場の建物の 2 階のホワイエにボードが立ち並んでいた．口頭発表数とポスター発表数の割合であるが、口頭発表が圧倒的におおく全体の 8 ～ 9 割程度であり、ポスターは 1 日 100 件程度であった．おそらく、口頭発表会場を多数確保できており、口頭希望者のほとんどが希望通りになっていると考えられる．

報告者の目的の一つに、来年 8 月に海洋研究開発機構横浜研究所で開催を予定しているアジア－太平洋における地球ダイナミクスワークショップについて、参加者数がもっとも期待できる中国本土での宣伝活動であったが、中国国内の一部の研究者からの問い合わせがあり、宣伝効果はそれなりにあったのだと考えている．日本地球惑星科学連合からのサポートに感謝している．

なお、中国共産党大会が学会の日程と同じ時期にあり、会場周辺の警備がものものしかった．

2-2. IAG-IASPEI Kobe 参加報告

JpGU 事務局　白井佳代子
PEPS 事務局 浅田智世　岡田まゆみ

IAG-IASPEI 2017 Kobe　(July 30th, Sunday – August 4th, Friday)

Kobe International Conference Center
The Kobe Chamber of Commerce and Industry
展示期間：　July 31st, Monday – August 4th, Friday
展示会場：　Reception Hall, 3rd Floor #1 Booth
配布物：

【JpGU】 2018 年大会に関する三つ折りパンフレット（300 部）- 残部 8
ノベルティ（Umbrella Cover 300 個）16 個残
連合のロゴを掲載してくれている学協会の英文雑誌
1. The Journal of Mineralogical and Petrological Sciences (JMPS)
2. Earth, Planets and Space (EPS)
3. Geochemical Journal (GJ)
4. Journal of Agricultural Meteorology
5. Hydrological Research Letters
6. Resource Geology

【PEPS】 日本語リーフレット 230 部 – 残部 166
英語リーフレット 200 部 – 残部 11
A3 日本語パンフレット 250 部 – 残部 200
A3 英語パンフレット 200 部
論文サンプル 200 部
名入れ扇子（3 種類）600 個 – 残 46
フリクションボールペン 300 本 – 残 190
ステッカー（大）100 – 残 62
ステッカー（小）100 – 残 69

国際測地学協会 IAG と国際地震学・地球内部物理学協会 IASPEI は、四年に一度開催される IUGG 傘下の学協会で、IUGG の中間年に学術総会を開催している。今回は、IAG と IASPEI が合同した初めての事例であり、1995 年兵庫県南部地震が起きた神戸で開催された。約 60 か国から約 1100 人が参加した。前回日本で開催されたのは、IAG が 1982 年、IASPEI が 1985 年、IUGG が 2003 年であった。
組織委員会は、主催・共催・協賛・後援の各機関から構成され、山岡日本地震学会長が委員長を、日置日本測地学会長が副委員長を務めた。日本地球惑星科学連合は協賛し、組織委員会構成時は津田前会長が、開催時は川幡会長が委員として参画した。日本学術会議も主催であったため、安倍内閣総理大臣や大西日本学術会議会長から開会式にメッセージが寄せられた。

ブースでの出展は前後半に分け、下記の担当者で 2018 年連合大会と PEPS の広報宣伝活動を行った。
ブースセッティングおよび前半 3 日　：　PEPS 事務局　浅田・ JpGU 事務局　白井

後半 3 日および片付け　　：　PEPS 事務局　岡田

＜詳細＞

・7 月 30 日（日）：　16:00 より受付開始、中庭で Ice Breaker が開催

・7 月 31 日（月）：　10:00-13:00 ブース搬入

【受付】 Registration Counter に前もって送られてきた Barcode を印刷したものを提出。スキャンされた情報が反映された名札（A4 の用紙）を受け取り、必要な部分を切り取って名札ケースに入れて使用する形式であった。

10:00 の時点で受付が混雑している状況は全くなく、全日程を通して、受付で混乱は見られなかった。

プログラムブック、コングレスバックは別の場所に置かれ、自分でピックアップするスタイルであった。

① Registration counter

② Name card, holder, program book

会議は Kobe International Conference Center で開催されており、その 3F ホールの入り口、一番目につく場所が JpGU Booth であった。一番に申し込んだのが功を奏したのかも知れない。ポスター発表は Kobe International Conference Center の向かいの The Kobe Chamber of Commerce and Industry の 2F と 3F で行われた。一人 2 日ずつポスター展示ができたのは発表者には好評だったようだ。午後の coffee break はポスター会場でのみ開催された為、参加者が皆、ポスター会場に流れたのか、大変活発に議論が行われていたようである。

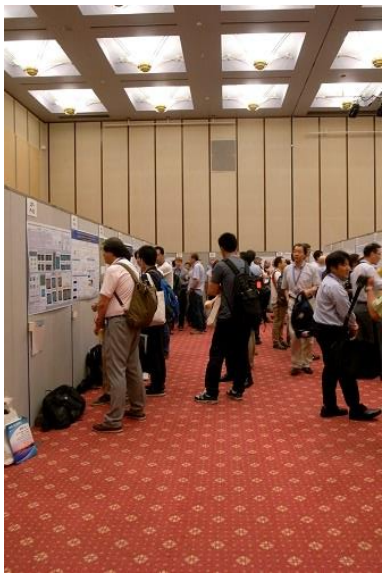
インド・ポーランド・オーストラリア・ネパール・ブータン・台湾・ポルトガル・カンボジア・日本等の国の方々がブースに立ち寄ってくれた。来場者からの主な質問は以下の通りであった。

・次回大会の日程（session proposal 等）
・トラベルサポート
・AGU とのジョイントはどうだったのか、今までと何が変わったのか？
・すべてのセッションが英語なのか？

Registration Logistics などはすべて JTB Communications Design に外注していた。両会場には coffee break の時、コーヒーと紅茶が用意され、ウォーターサーバーは常時設置してあった。

Plenary Lecture は IAG と IASPEI と各々主催で開催され、有料の Dinner Party も同様に各々主催で開催されたようである。
ポスターセッションのコアタイムはオーラルセッションとはオーバーラップしない形で毎日 15：30-16：30 に設定されており、色々な意味で時間設定に余裕が感じられた。

ポスターボードは縦置きであったが、スペースは十分に余裕があった。



国際会議場の作りが複雑でとポスター会場の案内など、少しわかりにくい印象があった。
最後に IAG-IASPEI は人数も小規模で、アットホームな感じでスタートした頃の JpGU を思いだした。

今回の総セッション数は 43、 内 IASPEI 27、 IAG 7、 Joint 9
総発表数は 1119、 内 IASPEI 563、 IAG 253、 Joint 303
参加国数は 60 ヵ国、総参加者数は 1075 人、 内 IASPEI 723 人、IAG 35 人であった。

次回は IUGG との総会で IUGG centennial にもなる Canada の Montreal で 7/8-19/2019 に開催予定である。

2-3. AOGS 2017 Singapore 参加報告

事務局　白井　佳代子

＜背景＞
日本地球惑星科学連合(JpGU)と AOGS は MOU に基づき各々の大会で complimentary booth を提供している。 今回も JpGU Meeting 2018 のプロモーションと PEPS の宣伝、のため、AOGS 2017 Singapore B02 ブースにて出展を行った。
今回は IAG-IASPEI2017 が直近で開催された為ブース出展を見合わせた地震研のリーフレットと Partnership Society である AGU の Fall Meetings のポスターもブースに掲載し、併せて紹介した。
＜JpGU 関係者＞
事務局の担当として、白井佳代子、AOGS から招待された川幡穂高会長、木村学グローバル戦略委員会委員

長、末広潔国際コーディネーター、高橋幸弘 Space and Planetary Sciences Section President 兼 グローバル戦略員会アジア太平洋作業部会長、Liu Huixin 前プログラム委員長、がブースにて宣伝活動を行った。今回も Huixin 先生のお子様方、Sophie さんと Reo (Leo?)くんが Goodwill ambassador として大活躍してくれた。また今回 AOGS へ初参加していた富山大学の小坂由紀子さんも、突然のお願いに快く最終日のブース担当をしてくれ、JpGU ブースは最後まで大盛況であった。

＜期間＞

会期は 8 月 6 日（日）から 8 月 11 日（金）までの 6 日間で、8 月 6 日（日）の Welcome Reception から最終日まで、JpGU Meeting 2018 のリーフレット 500 部、JpGU 紹介の Booklet 400 部、PEPS のリーフレット 250 部と共に、JpGU ロゴの入った Umbrella cover480 枚と PEPS 提供の扇子 300 個、フリクションボールペン 200 個、PEPS のステッカー100 枚を配布した。JpGU ブースは大盛況で、331 名の名前とメールアドレスをいただき、ブース来訪のお礼のメールを 8 月中に送る予定である。

今回も連合のロゴを掲載してくれている以下の学会のジャーナルと PEPS の
Review Paper のサンプルも真剣に見てピックアップしていく若い参加者が多く、最終日にはすべて配布された。

1. The Journal of Mineralogical and Petrological Sciences (JMPS)
2. Earth, Planets and Space (EPS)
3. Geochemical Journal (GJ)
4. Journal of Agricultural Meteorology
5. Hydrological Research Letters
6. Resource Geology

＜ブースへの来訪者＞

ブースに立ち寄られた方々はフィリピン、中国、台湾、韓国、インド、スリランカと多岐に渡り、特に若者の参加者が多いように見えた。 Student Volunteer として AOGS の運営を手伝っていた学生ボランティアは今回はフィリピンからの学生が多く、来年度の日本での大会への興味を示していた。

＜具体的なレポート＞

１）場所・現地の様子：展示会場は Singapore の Marina 地区の Suntec Singapore Convention & Exhibition Centre の 3F で開催された。

２）プログラム

1st: 8:30-10:30 (2.0h) 2nd: 11:00-12:30 (1.5h)
3rd: 14:00-15:30 (1.5h) 4th: 16:00-18:00 (2.0h)

ポスターコアタイムは 3rd のタイムフレームに設定されていた。

２）会場サービス（ドリンクなど）：

AM Coffee/Tea：10:30am-11:00am PM Coffee/Tea：3:30pm-4:00pm
3:30pm 頃からはビールもサーブされた。

Welcome Reception：2 日目（月曜日；セッション開始日）：6:30pm-8:30pm にポスター会場と展示場の間のスペースであった。ビュッフェとビール、ワインなどが提供され、和やかな雰囲気であった。

３）出展者

出展者へのランチ提供 ： 毎日ホール外のコーナーで、ビュッフェスタイルのランチが提供された。恒例になっている

ようで、出展社には好評であった。

NASA の Hyperwall presentation も開催されていた。今回の Student Program では会場での Presentation と共に近隣の学校に出張授業を行ったようである

他には台湾、韓国からの出展者も多く、日本からは他に EPS(Earth, Planets and Space)が出展していた。出展者サービスとして Innovation Theatre が無料で提供されており、毎日 1,2 件プレゼンテーションしていた。

日本からも EPS が発表しアピールしていた。

４）参加者など：レジストレーションは JpGU Meeting と同様、事前に送られてきたバーコートをスキャンして発券するシステムであり、発券もスムーズで行列ができることはなかったようである。投稿は 2460 件、参加人数は 49 の国と地域から 2,297 人でであった。

５）インターネット：会場すべてでスムースに無料インターネット接続が出来ていた。

６）4 Union Meeting

8/10（木）#304 にて AOGS 主催の 4 Union Meeting が開催された。

以下メモ部分末広さん作成

Attendees:

AOGS: Chu-Chieh Wu, Present Secretary General,
David Higgitt, Next President
Cheng-Hoon Khoo

EGU: Philippe Courtial, Executive Secretary

JpGU: Hodaka Kawahata, President
Toshitaka Tsuda, Past President
Gaku Kimura, Global Strategy Committee Chair
Yukihiro Takahashi, Chair of Working Group for
Collaborations with Asian and Pacific Academic Societies
Kiyoshi Suyehiro, International Program Coordinator
Kayoko Shirai, Program Manager, Secretariat

AGU: reps not attending.

Wu Chun-chieh chaired the meeting. He opened the meeting and stated that we take this opportunity to exchange ideas for future collaborations in the form of free discussion. Among the topics discussed;

(1) AOGS-EGU Joint Conference in February 2018 in the Philippines is a bi-lateral experimental effort and will aim for a few hundred participants. Its planning has started since about 8 years ago and an agreement was reached in 2014 AOGS meeting. Such joint conferences with specific themes in the future will be discussed among the 4 Unions.

(2) JpGU held a joint meeting with AGU this year with success. Both Unions will build on this success to host another joint meeting in 2020.

(3) EGU meeting is growing and 14,000 participants, this year. The number of Chinese participants showed accelerating increase, starting since 2014.

(4) AOGS Meeting is to be held in June/July/August timeframe. 2018 Hawaii meeting is in June avoiding the high season. AOGS has no membership fees.

(5) EGU has no sponsors; no donation programs. Attendants agreed the importance is the independence of the Union.

(6) PEPS and EPS are the 2 main journals of JpGU and its associate societies. We envision their merger in the near future.

(7) EGU put on the table the issue of pre-print server concept. AGU is forming an advisory committee on this matter. All Unions are encouraged to participate in this discussion.

(8) Besides the 4 Unions' annual meetings, there are international meetings of ICSU umbrella. There are limits to attending these meetings for an individual. Perhaps, we can focus on connecting similar efforts across national borders or finding gaps to be filled across disciplines to serve better our communities.

(9) All participants recognized the importance of meeting face to face and exchange candid ideas.

Next 4 Unions meeting will be hosted by EGU during the 2018 EGU Annual Meeting in Vienna.

７）Convener's Dinner

隣接する Pan Pacific Hotel L3 の The Edge を貸し切って開催された。

直前のユニオン合同会議が長引いた為、スタートには参加できていないが、特に挨拶などがセッティングされているわけではなく、本当にフレンドリーにパーティーで食事を楽しんでいる感じであった。一応入り口で Convener's Dinner のチケットは回収していた。

写楽のタペストリーは今回も大変好評であったので、海外でのブース出展の時には今後とも使用するとよいと思う。

また、JpGU 自体の宣伝用にはこのタペストリーがよいが、JpGU は Meeting がメインの事業なので、年度を変えれば毎回使えるような布製のタペストリーをもう 1 枚作成する必要があるように思う。2018 年度のグローバルの予算作成時に組み込んでもらえるとよいと思う。

Picture 1.

Picture 2.

Picture 3.

Picture 4.

写真：Picture 1. #B02 JpGU Booth at Exhibition Hall in Suntec Convention Centre
Picture 2. Registration
Picture 3.Convention Center
Picture 4. Poster presentation area

2-4. JpGU Meeting 2018 での AGU/AOGS/EGU との Joint Session について

AGU とジョイント希望　　※〇は AGU より JpGU ID 取得

	Joint with	Cate-gory	Sub-category	Main Sect	Title	Main Convener	Co-convener (1)	Co-convener (2)	Co-convener (3)
1	AGU	P	PS		Outer Solar System Exploration Today, and Tomorrow	Jun Kimura	Yasumasa Kasaba	Steven Vance	Kunio M. Sayanagi
2	AGU	P	PS		Results from Akatsuki and advances in Venus science	Takehiko Satoh	Takeshi Horinouchi	Masaru Yamamoto	〇Kevin McGouldrick
3	AGU	P	EM		Space Weather, Space Climate, and VarSITI	Ryuho Kataoka	〇Antti A Pulkkinen	Kanya Kusano	Kazuo Shiokawa
4	AGU	A	AS		Advances in Tropical Cyclone Research: Past, Present, and Future	〇Masuo Nakano	Akiyoshi Wada	〇Sachie Kanada	Kosuke Ito
5	AGU	A	OS		Seasonal-to-decadal climate variability and predictability	〇Takashi Mochizuki	〇V Ramaswamy	Yushi Morioka	
6	AGU	A	OS		Marine ecosystems and biogeochemical cycles: theory, observation and modeling	Shin-ichi Ito	Takafumi Hirata	〇Eileen E Hofmann	〇Enrique N Curchitser
7	AGU	A	OS		What we have learned about ocean mixing during the last decade	Toshiyuki Hibiya	〇Louis St Laurent	Ren-Chieh Lien	
8	AGU	A	HW		Human-Natural system interactions and solutions for environmental management	〇Yuei-An Liou			
9	AGU	A	HW		Materials transport and nutrient cycles in watersheds; Human and climate impacts	Mitsuyo Saito	Shin-ichi Onodera	Takahiro Hosono	〇Adina Paytan
10	AGU	A	HW		Hydrological Cycle and Water Environment	Seiya Nagao	Isao Machida	Shin'ichi Iida	Takeshi Hayashi

11	AGU	A	CG		Global Carbon Cycle Observation and Analysis	Kazuhito Ichii	Prabir Patra	Toshinobu Machida	○David Crisp
12	AGU	H	DS		Natural hazards impacts on the society, economics and technological systems	ELENA PETROVA	Hajime Matsushima	○Vivek Shandas	
13	AGU	H	DS		Landslides and related phenomena	Masahiro Chigira	Gonghui Wang	Fumitoshi Imaizumi	
14	AGU	H	CG		Deltas and estuaries: multidisciplinary analyses of complex river-mouth systems	Yoshiki Saito	Kazuaki Hori	○ Guan-Hong Lee	
15	AGU	H	CG		Climate-human system interaction	Kaoru Tachiiri	Tokuta Yokohata	Katsumasa Tanaka	TAKAHASHI KIYOSHI
16	AGU	S	SS		The Role of Slow Slip Events in the Earthquake Cycle: Stressing, Triggering, and Hazard	○Matt Gerstenberger	Naoshi Hirata	○Bill Fry	○Laura M Wallace
17	AGU	S	SS		Effective usage of PSHA	○Matt Gerstenberger	Danijel Schorlemmer	Ken Xiansheng Hao	Kuo-Fong Ma
18	AGU	S	IT		Planetary cores: Structure, formation, and evolution	Hidenori Terasaki	Eiji Ohtani	○William F McDonough	George Helffrich
19	AGU	S	IT		Do plumes exist?	Hidehisa Mashima	○Gillian R Foulger	Dapeng Zhao	
20	AGU	S	IT		Structure and Dynamics of Earth and Planetary Mantles	Takashi Yoshino	Dapeng Zhao	Takashi Nakagawa	
21	AGU	S	IT		Probing the Earth's interior with geophysical observation on seafloor	Daisuke Suetsugu	Guilhem BARRUOL	Hitoshi Kawakatsu	○Douglas Wiens
22	AGU	S	IT		Deep Carbon: Diamond formation and carbon speciation in Earth and planetary processes	Eiji Ohtani	Konstantin Litasov	Hiroyuki Kagi	○Craig E Manning
23	AGU	S	IT		Interaction and Coevolution of the Core and Mantle in the Earth and Planets	Tsuyoshi Iizuka	Hidetoshi Shibuya	Taku Tsuchiya	Kenji Ohta
24	AGU	S	IT		The lithosphere and the asthenosphere	○Catherine Rychert	Hitoshi Kawakatsu		

25	AGU	S	MP		Oceanic and Continental Subduction Processes	REHMAN Ur Hafiz	Tatsuki Tsujimori	○Chin Ho Tsai	
26	AGU	S	VC		Pre-eruptive magmatic processes: petrologic analyses, experimental simulations and dynamics modeling	Michihiko Nakamura	Akihiko Tomiya	Shanaka L de Silva	Fidel Costa
27	AGU	S	CG		Intraslab and intraplate earthquakes	Saeko Kita	Tomohiro Ohuchi	○Thomas Pascal Ferrand	Keishi Okazaki
28	AGU	S	CG		Science of slow earthquakes: Toward unified understandings of whole earthquake process	Satoshi Ide	Hitoshi Hirose	Kohtaro Ujiie	Takahiro Hatano
29	AGU	S	CG		Turbidity current: from triggers for the generation to the depositional and morphological processes	Miwa Yokokawa	Norihiro Izumi	Takeshi Nakajima	Hajime Naruse
30	AGU	B	CG		From Deep Sea to Deep Space: the Solar System Ocean World Exploration to Search for Life	Hajime Yano	○Christophe Sotin	Ken Takai	
31	AGU	M	IS	S	Interdisciplinary studies on pre-earthquake processes	Katsumi Hattori	Jann-Yenq Liu	Dimitar Ouzounov	○Qinghua Huang
32	AGU	M	IS	A	Evolution and variability of Asian Monsoon and its linkage with Cenozoic global cooling	Masanobu Yamamoto	Ryuji Tada		
33	AGU	M	GI	A	Open Science as a New Paradigm: Research Data Sharing, Infrastructure, Scientific Communications, and Beyond	Yasuhiro Murayama	Yasuhisa Kondo	Baptiste Cecconi	Sean Toczko
34	AGU	M	ZZ	A	Great Debate: Role of Open Data and Open Science in Geoscience	Atsushi Higuchi			
35	AGU	M	TT	H	HIGH-DEFINITION TOPOGRAPHY AND GEOPHYSICAL DATA ANALYSIS	Yuichi S. Hayakawa	○ Christopher A Gomez	Shigekazu Kusumoto	
36	AGU	S	CG		Hard-Rock Drilling: Oman to Oceanic Lithosphere to Island Arc Formation and Beyond	Eiichi TAKAZAWA	Katsuyoshi Michibayashi	Peter B Kelemen	Damon A H Teagle
37	AGU	B	CG		Earth and Planetary Science Frontiers for Life and Global Environment	Yoshinori Takano	Yohey Suzuki	Keisuke Fukushi	Shingo Kato

セッション取下げ

38	AGU	G	XX		Geoethics for Today's Geoscientists: Awareness, Responsibility and Challenges	○Billy M Williams	○Christine McEntee	○Eric A Davidson	Kiyoshi Suyehiro

EGU とジョイント希望（濃い青のセッションはジョイントとして不採択）

	Joint with	Cate-gory	Sub-category	Main Section	Title	Main Convener	Co-convener (1)	Co-convener (2)	Co-convener (3)
1	EGU	H	DS		Natural hazards impacts on the society, economics and technological systems	ELENA PETROVA	Hajime Matsushima	Vivek Shandas	
2	EGU	H	DS		Landslides and related phenomena	Masahiro Chigira	Gonghui Wang	Fumitoshi Imaizumi	
3	EGU	H	CG		Climate-human system interaction	Kaoru Tachiiri	Tokuta Yokohata	Katsumasa Tanaka	TAKAHASHI KIYOSHI
4	EGU	S	IT		Do plumes exist?	Hidehisa Mashima	Gillian R Foulger	Dapeng Zhao	
5	EGU	S	IT		Probing the Earth’s interior with geophysical observation on seafloor	Daisuke Suetsugu	Guilhem BARRUOL	Hitoshi Kawakatsu	Douglas Wiens
6	EGU	S	IT		The lithosphere and the asthenosphere	Catherine Rychert	Hitoshi Kawakatsu		
7	EGU	S	VC		Pre-eruptive magmatic processes: petrologic analyses, experimental simulations and dynamics modeling	Michihiko Nakamura	Akihiko Tomiya	Shanaka L de Silva	Fidel Costa
8	EGU	S	CG		Intraslab and intraplate earthquakes	Saeko Kita	Tomohiro Ohuchi	Thomas Pascal Ferrand	Keishi Okazaki
9	EGU	S	CG		Science of slow earthquakes: Toward unified understandings of whole earthquake process	Satoshi Ide	Hitoshi Hirose	Kohtaro Ujiie	Takahiro Hatano
10	EGU	S	CG		Hard-Rock Drilling: Oman to Oceanic Lithosphere to Island Arc Formation and Beyond	Eiichi TAKAZAWA	Katsuyoshi Michibayashi	Peter B Kelemen	Damon A H Teagle

11	EGU	S	CG		Turbidity current: from triggers for the generation to the depositional and morphological processes	Miwa Yokokawa	Norihiro Izumi	Takeshi Nakajima	Hajime Naruse
12	EGU	B	PT		Biomineralization and the Geochemistry of Proxies	Takashi Toyofuku	Hiroshi Kitazato	Jelle Bijma	Kotaro Hirose
13	EGU	M	IS	S	Interdisciplinary studies on pre-earthquake processes	Katsumi Hattori	Jann-Yenq Liu	Dimitar Ouzounov	Qinghua Huang
14	EGU	M	IS	H	Conservation of geoparks, natural geosites and cultural heritage: weathering process and damage assessment	Chiaki T. Oguchi	Tetsuya Waragai	Magdalini Theodoridou	
15	EGU	M	TT	H	HIGH-DEFINITION TOPOGRAPHY AND GEOPHYSICAL DATA ANALYSIS	Yuichi S. Hayakawa	Christopher A Gomez	Shigekazu Kusumoto	Miguel Gomez-Heras
16	EGU	G	XX		Employment and work-life-balance of female geoscientists in Japan: International and Interdisciplinary comparison	Naomi Harada	Rie Hori, S.	Chiaki T. Oguchi	Wonsuh Song
17	EGU	H	TT		Non-destructive techniques applied to stone cultural heritage	Chiaki T. Oguchi	Celine Elise Thomachot-Schneider	Patricia vazquez	

AOGS とジョイント希望 (濃い青のセッションはジョイントとして不採択)

	Joint with	Cate-gory	Sub-category	Main Section	Title	Main Convener	Co-convener (1)	Co-convener (2)	Co-convener (3)
1	AOGS	P	EM		Effects of recurrent storms: from the heliosphere to the atmosphere	ALEXEI DMITRIEV	Yoshizumi Miyoshi		
2	AOGS	A	AS		Advances in Tropical Cyclone Research: Past, Present, and Future	Masuo Nakano	Akiyoshi Wada	Sachie Kanada	Kosuke Ito
3	AOGS	A	CG		Global Carbon Cycle Observation and Analysis	Kazuhito Ichii	Prabir Patra	Toshinobu Machida	David Crisp

4	AOGS	S	SS		Nankai Trough Seismogenic Zone Experiment toward the final challenge	Kyuichi Kanagawa	Gregory F Moore	Masataka Kinoshita	Keir Becker
5	AOGS	S	VC		Pre-eruptive magmatic processes: petrologic analyses, experimental simulations and dynamics modeling	Michihiko Nakamura	Akihiko Tomiya	Shanaka L de Silva	Fidel Costa
6	AOGS	S	CG		Science of slow earthquakes: Toward unified understandings of whole earthquake process	Satoshi Ide	Hitoshi Hirose	Kohtaro Ujiie	Takahiro Hatano
7	AOGS	M	IS	S	Interdisciplinary studies on pre-earthquake processes	Katsumi Hattori	Jann-Yenq Liu	Dimitar Ouzounov	Qinghua Huang
8	AOGS	M	TT	H	HIGH-DEFINITION TOPOGRAPHY AND GEOPHYSICAL DATA ANALYSIS	Yuichi S. Hayakawa	Christopher A Gomez	Shigekazu Kusumoto	

2-5. Myanmar geoscientific community for JpGU

Brief comments on linkage with Myanmar geoscientific community for JpGU

Kiyoshi Suyehiro (JAMSTEC)

- KS gave talks at MAESA 2017 Marine Geosciences Workshop (Nov 1) and Breaking New Frontiers Conference (Nov 2-3) in Yangon, at which time had the opportunity to discuss future collaborations with Myanmar and international participants.

- If interested, JpGU may seek to sign an MOU with MAESA and MGS (see below) societies to promote scientific exchanges. We may agree on proposing a joint session at JpGU 2019, for example, on regional tectonics of Myanmar in the context of India plate collision to subduction against Eurasia plate currently being studied by international groups extensively.

Geoscientific societies of Myanmar

Myanmar Applied Earth Sciences Association (MAESA) www.maesa.org

We at MAESA aim to promote the new talent, knowledge and actions necessary for applied earth science practitioners to help solve the resources and environmental sustainability challenges in Myanmar.

MAESA plans to realize this Vision, through three groups of actions.

Strengthening Myanmar's human resources and institutional capacities in applied earth sciences through collaboration with local and international partners,

Promoting technology that improves economic soundness and environmental sustainability in exploring and producing Myanmar's mineral and energy resources,

Advancing environmental protection and effective disaster management in Myanmar.

Myanmar Geosciences Society (MGS) myanmargeosciences.org
After GeoMyanmar 2012 and 2014, a very successful, first international geological conference in Myanmar systematized by Myanmar Geosciences Society, MGS is planning to organize similar international meetings in 2018. A regional geological conference, namely GeoMyanmar 2018 will be hosted by MGS in January and February 2018, in the same occasion of GeoMyanmar 2018 in Yangon (www.mgsgeomyanmar.com).
Ref: from http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/1000023395.pdf

Overview of the Country

Basic Information of Myanmar [1), 2), 3)]

National Flag

Country Name	Long form: Republic of the Union of Myanmar Short form: Myanmar	
Capital	Naypidaw	
Area (km²)	Total : 676,590 Land: 653,290 Inland Water: 23,300	
Population		53,259,018
Population density (people/km² of land area)		82
Population growth (annual %)		0.9
Urban population (% of total)		33
Languages	Myanmar	
Ethnic Groups	Burmese (about 70%),many other ethnic groups	
Religions	Buddhism (90%), Christianity, Islam, others	
GDP (current US$) (billion)		55(Estimate)
GNI per capita, PPP (current international $)		-
GDP growth (annual %)		6.4(Estimate)
Agriculture, value added (% of GDP)		48
Industry, value added (% of GDP)		16
Services, etc., value added (% of GDP)		35

Brief Description

Myanmar covers the western part of Indochina Peninsula, and the land area is about 1.8 times the size of Japan. Myanmar has a long territory stretching north to south, with the Irrawaddy River running through the heart of the country. While Burmese is the largest ethnic group in the country, the country has many ethnic minorities.

Myanmar joined ASEAN on July 23, 1997, together with Laos. Due to the isolationist policy adopted by the military government led by Ne Win which continued until 1988, the economic development of Myanmar fell far behind other ASEAN countries.

Today, Myanmar is a republic, and President Thein Sein is the head of state. Myanmar was a socialist country until 1988, but after the coup d'état, the military took control of the government. The current political system has been in place since 2011. Myanmar is expected to accelerate its economic development through democratization, which is being promoted under the current administration.

Natural Hazards
50% of the total number of disasters in Myanmar was related to floods followed by storm (23%), earthquake (15%), and mass movement-wet (12%), whereas 73% of the total affected people by disasters were due to storm followed by floods in 1980-2011. Similarly, storm is a major cause of disaster-related death and biggest estimated damage cost (86%). Earthquake (11%) and flood (3%) are next on the estimated damage cost. This pattern of disasters is due to Cyclone Nargis in 2008 that affected 2,400,000 people, left 138,000 fatalities and estimated damage cost of US$4,000,000 to Myanmar.

2-6. オープンサイエンス関連動向の紹介　－AGU「プレプリントサーバ」の議論へ向けて－

AGU プレスリリース「Earth and Space Science Open preprint server to be powered by AGU and Atypon」（21-SEP-2017）

AGU から Web メディア Eureka Alert を通じて，地球惑星科学分野のプレプリントサーバ「ESSOAr（Earth and Space Science Open Archive）」を立ち上げたと記事リリースがあった.
プレリント（投稿前・査読前の論文原稿），また会議資料（主にポスター論文資料）をサーバ上で共有．誰でもアクセス可能．Wiley 社も支援.
地球惑星科学の研究者にとって，より迅速なコミュニティからの反応・意見が聞けて，自分の研究活動の素早くオープンな周知・広報も可能になる.
アップロードされた原稿・資料には DOI（Digital Object Identifier）が付与される
プレプリントサーバ ESSOAr は，従来の論文原稿アーカイブにくわえて，プレゼンテーション資料，ポスター論文資料，関連するマルチメディア（音声，映像など）の資料を引用可能とする，研究者にとっての新しい選択肢となる.
AGU CEO Chris McEntee 談「AGU はこれまでずっとオープンサイエンスを推進・啓蒙してきた．プレプリントサーバはその上でさらに我々の活動を強化し，オープンアクセスジャーナルとヶ休データマネジメントを発展させるものになるだろう」
原稿・資料のアップロードは 2018 年から可能になる予定.

第 2 回 SPARC Japan セミナー2017
「プレプリントとオープンアクセス」参加報告書

10 月 30 日 11:00～16:40 @ 国立情報学研究所

講演者
「arXiv.org の次世代システムの公開と戦略」
引原 隆士 （京都大学図書館機構長/arXiv.org 会員コンソーシアム代表）

「学術情報共有とオープンアクセスの未来」
Gregg Gordon（Managing Director, SSRN）

プレプリント各論(1)「化学分野におけるプレプリントの位置付け・課題等について」
生長 幸之助 （東京大学大学院薬学系研究科/化学ポータルサイト Chem-Station 副代表）

プレプリント各論(2)「生命科学分野におけるプレプリントの位置付けや経験について，統合 TV について」
小野 浩雅 （情報・システム研究機構ライフサイエンス統合データベースセンター）

全体議論：モデレータ 坊農 秀雅
（情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）

JpGU 出席者：村山泰啓，篠崎美典

■村山先生による各分野ごとの状況のまとめ：

Physics（インターネット利用前の 1991 年に開始）
・プレプリント文化がかなり浸透している. ・学問部分野とプレプリントの親和性が高い. ・高温超電導を期にプレプリントが急速に普及した. ※現在同じような現象が例えばディープラーニング研究分野で起きている．共通しているのは研究の進展が速すぎて，査読を待っていられない状況による先取権の確保のために登録している.

Biology
・Physics 同様に普及してきている。しかし分野による認識の差は依然ある.

Chemistry
・Physics，Bio と比べると距離がある. ・多くの研究者が，プレプリント文化を進める立場からは心理的に遠いと感じている. ・Bio-chemistry などの境界領域研究が増えたことから，bio の文化として化学研究者が投稿前論文原稿をプレプリントサーバへ入れるようになってきた. ※日本化学会や米国化学会のトップジャーナルはプレプリントサーバへアップロードされた原稿は受理しない. ⇒コミュニティ全体あるいは中枢として合意はまだされていない.

全体意見
※講演者の実体験として，査読中の論文と同じ実験結果図面が何度も他の研究グループの論文（先行して出版された）の中で，結果として出てきた経験があるとのこと. これは，実験パラメータがなどが盗まれたのでは？という疑惑を払しょくするためにも，先行者の実験結果をタイムスタンプ付きで公表しておくのは重要か. ※分野内で学会，ジャーナル，機関などステークスホルダー間でプレプリントの利用・投稿・業績認知などが同期して進んでいるわけではない. 各研究者・グループ自身のモチベーションが主な原動力か.

■地球惑星科学でのプレプリント浸透の見通し

化学会での浸透の仕方を見ると，生物地球科学や素粒子物理に関わる宇宙惑星科学など，従来プレプリントサーバを利用していた分野との横断的・複合的分野の研究者がプレプリントサーバを持ち込むならば，浸透していく可能性があるのではないか．（村山）

プレプリントが普及している分野は，研究活動→論文発表の一連の流れの中に，プレプリントサーバでの公開がすでに組み込まれている．地惑分野でのそもそもの必要性については，研究活動の文化・慣習とプレプリントサーバとの親和性を検討・確認する必要があり，また，普及については，ジャーナルがプレプリントサーバ公開後原稿を受け入れるポリシー確立（物理学のように）と，国際的なルールの統一が確保されていないと難しいのではないかと思う．（存在するインフラは「使わなくてもよい」が，使ったことで「損をする」（ジャーナルに投稿できなくなる等）ことは避けなければいけない）
研究者個人の利益のみで考えると，地惑分野とプレプリントサーバについては多少ネガティブな印象を持ったが，同時期に参加したオープンサイエンスのシンポジウムで議論されていた国内外動向も同時に考慮すると，研究結果を正しい権利の元で正しく公開・シェアする観点においてプレプリントサーバは有効であり，プレプリントサーバの文化を普及させ，研究者に限らず，だれでも最新の研究結果にアクセスできるインフラの提供は JpGU の活動の一つとして有り得ると思う．また，そのように，自分のデータが正しい権利の元でアーカイブされるということ，そのデータが実際に他者に活用されるところまで行けば，公開する研究者のモチベーションにもつながるのではないかと考える．（篠崎）

【AGU が Eureka Alert から公表したプレプリントサーバに関する記事】

PUBLIC RELEASE: 21-SEP-2017

Earth and Space Science Open preprint server to be powered by AGU and Atypon

AMERICAN GEOPHYSICAL UNION

WAHSINGTON, DC, AND SANTA CLARA, CA -- The American Geophysical Union (AGU) and Atypon announced today a joint initiative to develop Earth and Space Science Open Archive (ESSOAr), a community server for the open dissemination of Earth and space science preprints and rich conference presentations. Development of the server, community engagement, and policies and practices will be a community effort guided by an international advisory board that will include representatives from societies across the Earth and space sciences. Its initial development will be supported by Wiley, AGU's publishing partner.

Preprint servers allow researchers to receive peer feedback that improves the final published output, and facilitates faster, open dissemination of research. Research outputs posted on preprint servers are also fully citable via digital object identifier (DOI) and freely accessible.

Atypon is building the new open access Earth and space science preprint server on top of its online publishing platform, Literatum, which will provide stability and regular feature enhancements, as well as content format interoperability.

ESSOAr will extend the traditional role of archiving manuscripts by also allowing researchers the option to preserve and to make citable presentations, posters, and related multimedia content from scientific conferences. More than 50,000 posters are presented across Earth and space science conferences, including about 17,000 at the AGU Fall Meeting. These are rich presentations of original research that can add to the understanding of the scientific process, but unless a follow-up article is published on the topic, that science is no longer discoverable. Their preservation will greatly increase scientific transparency.

"AGU has long been an advocate for open science and proper attribution of research, in collaboration with other organizations in the Earth and space science community," said Chris McEntee, AGU Executive Director and CEO. "The introduction of a preprint server for the Earth and space sciences builds on our previous efforts and public statements in open science, which include the expansion of AGU's open access journals and development of data management programs, and advances this work even further."

"Our interest and involvement in the ESSOAr initiative reflects our corporate commitment to open science", said Georgios Papadopoulos, Atypon's founder and CEO. "Offering preprint capabilities to support researchers' editorial needs is a natural extension of our core platform."

An advisory board will help guide ESSOAr, and currently includes participation from the Association for the Sciences of Limnology and Oceanography, Earth Science Information Partners, European Geosciences Union, Geochemical Society, Geological Society of America (GSA), Japan Geoscience Union (JpGU), and Society of Exploration Geophysicists. "GSA is pleased to participate in this advisory group to explore all the options for preprint publications," said Vicki McConnell, Executive Director, GSA.

"We appreciate the opportunity to learn about and guide a larger effort around developing preprint options for our community," added Kiyoshi Suyehiro, International Program Coordinator, JpGU.

Participation on the board does not constitute endorsement by the societies, though it is anticipated that each organization, through its own governance process, will endorse the effort. AGU hopes that other Earth and space science societies and scholarly publishers will join this effort.

###

ESSOAr will begin accepting content in 2018.

The American Geophysical Union is dedicated to advancing the Earth and space sciences for the benefit of humanity through its scholarly publications, conferences, and outreach programs. AGU is a not-for-profit, professional, scientific organization representing nearly 60,000 members in 139 countries. Join the conversation on Facebook, Twitter, YouTube, and AGU's other social media channels.

About Atypon

Atypon was founded in 1996 with headquarters in Santa Clara, CA, and offices worldwide. The company's publishing platform, Literatum, provides easy-to-use tools and automated technologies that free publishers to focus on content--not technology--giving them as much control of the presentation, marketing, and sale of their

online publications as they choose, as well as full support for any content type. Continual investment in innovation and development talent has helped create world-class software that allows publishers to quickly and cost-effectively build and revise content sites with their branding front and center, analyze and respond to usage patterns, manage user access, enhance content discovery and support marketing and digital commerce.

Disclaimer: AAAS and EurekAlert! are not responsible for the accuracy of news releases posted to EurekAlert! by contributing institutions or for the use of any information through the EurekAlert system.

プログラムおよび講演者

11:00- 11:10	開会／概要説明	坊農 秀雅 （情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）
11:10- 11:55	arXiv.org の次世代システムの 公開と戦略	引原 隆士 （京都大学図書館機構長 /arXiv.org会員コンソーシアム代表）
	11:55 - 13:00 休 憩	
13:00- 14:00	学術情報共有と オープンアクセスの未来	Gregg Gordon （Managing Director, SSRN）
	14:00 - 14:10 休 憩	
14:10- 14:55	プレプリント各論(1) 化学分野におけるプレプリント の位置付け・課題等について	生長 幸之助 （東京大学大学院薬学系研究科 /化学ポータルサイトChem-Station副代表）
14:55- 15:40	プレプリント各論(2) 生命科学分野におけるプレプリ ントの位置付けや経験について、 統合TVについて	小野 浩雅 （情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）
	15:40 - 16:00 休 憩	
16:00- 16:30	全体議論	モデレーター 坊農 秀雅 （情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）
16:30- 16:40	閉会挨拶	

参加費：無料

参加申込：下記ＵＲＬよりお申し込みください。

https://www.nii.ac.jp/sparc/event/

申込期限：平成29年10月26日（木）

お問い合わせ先： 国立情報学研究所　学術基盤推進部
学術コンテンツ課支援チーム SPARC担当
E-mail co_sparc_all@nii.ac.jp　FAX 03-4212-2375

研究データ利活用協議会 平成29年度第1回研究会

「デジタルアーカイブ」と「研究データ」の出会いシンポジウム

“Digital Archive” meets “Research Data”

～データの保存と活用へ、ライブラリアンとアーキビストの挑戦

日時: 2017年11月6日(月) 13:30～17:45（13:00開場）
会場: 国立国会図書館 東京本館 新館講堂

研究データ利活用協議会 RDUF Japan Link Center Research Data Utilization Forum

Twitter ハッシュタグ：#JaLC_RDUF2017

本日のプログラム

13:30~13:35 >>開会にあたって
国立国会図書館電子情報部長　小寺 正一

<第一部：国際会議報告>

13:35~13:55 >>5年目のRDAと次のステップへむけて～RDAモントリオール総会から
情報通信研究機構 戦略的プログラムオフィス研究統括、RDUF副会長　村山 泰啓

13:55~14:10 >>RDAに参加して～デジタルアーカイブとの接点
文部科学省科学技術・学術政策研究所 科学技術予測センター 上席研究官　林　和弘

14:10~14:30 >>デジタルデータの長期保存～iPRES2017
筑波大学図書館情報メディア系教授　杉本 重雄

14:30~14:45 >>iPRESに参加して～JPCOARの取組みから研究データの保存を考える
国立極地研究所情報図書室　南山 泰之

14:45~14:55 >> 休憩

<第二部：国内事例報告>

14:55~15:15 >>デジタルアーカイブと研究データ：人文学における利活用の展望
人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所准教授　北本 朝展

15:15~15:30 >>研究データとしての古典籍：その必要と活用
国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター 副センター長　山本 和明

15:30~15:45 >>自然史標本データのアーカイブと研究
国立科学博物館動物研究部 研究主幹　神保 宇嗣

15:45~16:00 >>アジア歴史資料センターの利活用
国立公文書館アジア歴史資料センター 次長　佐野 豪俊

16:00~16:15 >>国立国会図書館におけるデジタルアーカイブと研究データ～保存と活用の可能性
国立国会図書館電子情報部 副部長　川鍋 道子

16:15~16:30 >> 休憩・質問票提出

16:30~16:40 >> 研究データ利活用協議会案内
国立情報学研究所教授、RDUF会長　武田 英明

<第三部：討論>

16:40~17:40 >> フロアも交えたディスカッション
「デジタルアーカイブと研究データの出会い：保存と活用における課題と知見の共有に向けて」
司会：人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所准教授　北本 朝展

17:40~17:45 >> 閉会挨拶
国立情報学研究所教授、RDUF会長　武田 英明

主催　国立国会図書館 National Diet Library, Japan

後援　人間文化研究機構 国文学研究資料館
人文学オープンデータ共同利用センター Center for Open Data in the Humanities

◆ 講師ご紹介（発表順）

村山 泰啓（情報通信研究機構戦略的プログラムオフィス研究統括）
ICSU-WDS (World Data System)国際科学委員会ex officio委員、日本学術会議連携委員、国立極地研究所南極観測審議委員会委員、公益社団法人日本地球惑星科学連合理事。1999－2006年は北極域アラスカにおける上層大気観測日米共同研究計画の日本側リーダーを務める。京都大学生存圏研究所客員教授、内閣府「国際動向を踏まえたオープンサイエンスの推進に関する検討会」委員、国立国会図書館科学技術情報整備審議会専門委員などを歴任。文部科学大臣表彰科学技術賞受賞（2007年）。京都大学工学博士（1993年）。

林 和弘（文部科学省科学技術・学術政策研究所科学技術予測センター上席研究官）
東京大学大学院で有機化学を専攻しながら、1995年頃に行った日本化学会ジャーナルの電子化をきっかけに、学術情報流通の変革（デジタル化、Web化、オープン化）に対して、多様なステークホルダーと協働して包括的に取り組む。日本化学会学術情報部課長を経て、2012年より現職。学術情報流通と研究者社会の将来に関する調査研究活動を行う。研究データ利活用協議会やSPARC Japan等の実践の場からのボトムアップと、内閣府やG7科学技術大臣会合オープンサイエンス作業部会メンバー等、トップダウンからの政策作りの双方を通じてオープンサイエンスを推進。

杉本 重雄（筑波大学図書館情報メディア系教授）
1982年京都大学大学院工学研究科情報工学専攻単位取得退学。京都大学工学博士（1985年）。1990年代よりディジタルライブラリ、メタデータの研究に従事。現在、Dublin Core Metadata Initiative Governing Board、International Conference on Asia-Pacific Digital Libraries (ICADL)、 Joint Conference on Digital Libraries (JCDL)、 International Conference on Preservation of Digital Objects (iPRES)のSteering Committee等のメンバーを務める。

南山 泰之(国立極地研究所情報図書室)
2005年より国立極地研究所情報図書室に勤務。2007年～2008年、第49次日本南極地域観測隊に参加。その後、東京大学駒場図書館（2011年～2014年）を経て現職。オープンアクセスリポジトリ推進協会作業部会員、ジャパンリンクセンター運営委員会サービス企画分科会委員。研究データを中心とした電子リソースの保存、利活用促進に関心を持つ。

北本 朝展(人文学オープンデータ共同利用センター長、国立情報学研究所コンテンツ科学研究系 准教授)
1997年東京大学工学系研究科電子工学専攻修了。博士（工学）。現在、情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター センター長、国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系 准教授、総合研究大学院大学 情報学専攻 准教授。画像データの分析を中心に、データ駆動型サイエンスを人文科学や地球科学、防災等などの分野で幅広く展開する。文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員会推薦作品、山下記念研究賞などを受賞。オープンサイエンスの展開に向けた超学際的研究コラボレーションにも興味を持つ。

山本 和明（国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター 副センター長）
神戸大学大学院文化学研究科（博士課程）修了。博士（文学）。19世紀日本文学の研究者。相愛女子短期大学、相愛大学教授を経て、2013年 10月より現職。2014年4月からスタートした大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」 では、その当初から計画立案に携わり、事業を推進している。異分野融合研究や研究開発系共同研究などにも従事。

神保 宇嗣（国立科学博物館動物研究部 研究主幹）
2005年、東京都立大学大学院理学研究科博士課程修了、博士（理学）。東京大学総合文化研究科勤務を経て、2012年より国立科学博物館動物研究部研究員、2016年より現職。専門は、昆虫分類学および生物多様性情報学。蛾類の分類学的研究、昆虫類標本資料の収蔵管理、展示・普及事業等に従事する一方、サイエンスミュージアムネット、地球規模生物多様性情報機構（GBIF）の活動にも関わる。GBIF日本ノードワーキンググループメンバー。

佐野 豪俊(国立公文書館アジア歴史資料センター次長)
1986年東京大学教養学部卒。同年外務省入省。大臣官房総務課情報公開室長、在ウィーン国際機関日本政府代表部参事官、在アルゼンチン日本国大使館公使を務めた他、内閣官房、経済産業省、国際協力銀行（JBIC）にも在籍。昨年10月より現職。

川鍋 道子（国立国会図書館電子情報部副部長）
1987年、国立国会図書館入館。資料保存課長、科学技術・経済課長、収集・書誌調整課長を経て、2016年4月から現職。デジタルアーカイブジャパン実務者検討委員会構成員。

武田 英明（国立情報学研究所情報学プリンシプル研究系教授）
1991 年東京大学 工系研究科修了。工学博士。ノルウェー工科大学、 奈良先端技術院を経て、2006年より現職。 総合研究大学院複科情報専攻教授兼任。2005-2008 年東京大学客員教授、 2006-2010年国立情報学研究所 学術コンテツサービス研究センター長。2011-2015年ORCID（Open Researcher and Contributor IDOpen Researcher and Contributor ID）理事。専門は Web情報学、人工知能、設計。ジャパンリンクセンター(JaLC)共同運営委員会長、 NPO 法人リンクト・オープン・データ・イニシアティブ理事長も務める。

2-7. GSA 2017 について

Hello Annual Meeting Attendee

- POST-MEETING ISSUE -

GSA 2017 Annual Meeting & Exposition News | Twitter: @geosociety #GSA2017

Post-Meeting Survey

We Value Your Feedback

We hope you enjoyed the GSA 2017 Annual Meeting in Seattle. Because GSA strives to continually improve its meetings, we ask that you take this short survey (11 questions) to let us know about your experiences and opinions regarding this year's meeting. Please respond by 15 Nov. at 11:45 p.m. MST.

By the Numbers

- **Attendees:** 7,100
- **Professionals:** 2,800
- **Early Career professionals:** 700
- **Students:** 2,600
- **K-12 teachers:** 100
- **On To the Future scholars:** 71
- **Members of the media:** 30
- **Countries represented:** 54

• **Sessions:** 393

• **Abstracts accepted:** 4,950 (2,000 poster, 2950 talks)

• **Field Trips:** 20 trips with 526 participants

• **Short Courses:** 18 courses with 440 participants

• **Exhibitors:** Companies: 211, Booths: 250

• **Amount donated by attendees toward the GSA Student Travel Fund:** $7200

• **Local area field trip for high school students viewing GSA:** 150

• **Local geocaching community viewing GSA public lectures:** 100

• **Number of days until GSA 2018 in Indianapolis, Indiana:** 368

Lost & Found

Lose Something?

Every year, many lost items are left at the convention center. After the meeting, we bring them back to GSA headquarters in Boulder. If you lost something, email William Cox at wcox@geosociety.org to check to see if we have it. We'll happily return it to you if we do.

Thanks ...

Thanks to the GSA 2017 Organizing Committee

General Co-Chairs: Alan Gillespie and Darrel Cowan

Field Trip Co-Chairs: Ralph Haugerud and Harvey Kelsey

Technical Program Chair: Dick Berg

Technical Program Vice Chair: Kevin Mickus

Sponsorship Chair: Brian Butler

K-12 Chair: Michael O'Neal

Student Committee Chair: Linnea McCann

Student Committee Members: Madeleine Hummer, Michael Zackery McIntire, Virginia Littell, Keith Hodson